

原爆表象と越境する身体——ヤコブソン『ヒロシマ』と舞踏の比較

梶彩子(早稲田大学)

ソ連のバレエ振付家レオニード・ヤコブソン(1904-1975)の創作作品の一つに、小品《ヒロシマ》(音楽: グレツキ、1969年)がある。本作品は丸木位里・丸木俊の《原爆の図》にインスピレーションを得て創作された。ここで想起されるのは、1970年代後半、日本からフランスに紹介され、同時期に国外で「原爆表象」と誤解された暗黒舞踏の作品である。どちらの作品も、傷ついた身体そのものを表象の中心に据えていた点で共通している。

問題は、この「傷ついた身体」をめぐり、意図的な原爆表象が日本国外で先行し、日本の舞踏はむしろ外部の視線を通して原爆表象として誤って受容されたことである。スーザン・ソントグは『他者の苦痛へのまなざし』(2003)において、戦争写真について「遠い異国的な土地であればあるほど、われわれは死者や死の間際にある人々をあますところなく真正面から捉える傾向がある」と述べている。ヤコブソンが1970年代後半、フランスの観客が当事者の意図せぬところで原爆と舞踏を結びつけるよりも前に、原爆の暴力により傷ついた身体を直視し舞踊作品化しえたのは、彼が原爆の悲劇に対し圧倒的な他者であったからだと理解できるのではないだろうか。この二つの身体表象は、直接的な接触を持たぬまま冷戦下という時代条件の下で並行して生まれたという点において文化的共時性を示している。ここで問われるのは、原爆表象において非当事者が他者の苦痛をどのように身体化するのか、あるいは見出すのかという問いである。本発表では、冷戦下に東西で生まれたソ連バレエと舞踏の身体表象を取り上げ、創作背景・振付・受容の比較を通して「異なる身体をあいだ」で立ち現れる表象の交差を明らかにしてゆく。

ヤコブソンは現代テーマに幅広く興味関心を抱いており、第二次世界大戦(独ソ戦)の傷跡は複数の作品に色濃く表れている。しかし、例えば彼自身がユダヤ人という民族的帰属上当事者であったホロコーストを描くことはなかった。他の戦争を主題とした作品と比べても、《ヒロシマ》こそが、傷ついた身体を最も真に迫って表現した作品であり、彼自身、本作品について「20世紀のあらゆる惨禍への抗議とならなければならない」と語っていた。

冷戦下のソ連では原爆の悲劇を取り上げた創作がイデオロギー上奨励されており、ソ連バレエもその例にもれなかった。特に1962年キューバ

危機によって核戦争が切迫したことを反映し、複数のバレエ作品が上演された。1963年、キーロフ劇場に所属していたヤコブソンも、平和な幸福な日常が原爆投下により破壊されるという、ソ連バレエに典型的なプロットのあるバレエを計画していたが、実現には至らなかった。その後《原爆の図》第一部～第七部から得た強い印象を元に、原爆犠牲者の恐怖と苦痛に満ち溢れたマイムと、口を大きく開いた「非美的」なポーズ、その場で小さく足踏みを繰り返す動きが組み合わされた。6人のダンサーは焼けただれた皮膚を容易に連想させる全身タイツに身を包み、脚を引きずりながら順に登場し、傷ついた身体そのものを観客に提示する。その印象は強烈であり、ヤコブソン作品の中でも際立って残酷である。《ヒロシマ》はイデオロギー上公式路線に沿ったテーマを取り上げていたにも関わらず、その表象の凄惨さにより上演禁止処分を受け、1970年代前半にヤコブソン自身のカンパニー〈舞踊ミニアチュール〉で初演された。なお本作品の一部は栗原小巻主演の日ソ共同映画『モスクワが愛』(1974年)にも収録されるはずだったが、日本側の反対により実現せず、映画のために撮影されたフィルムも処分され、振付は散逸し、現在確認できるのはその一部のみである。

一方、(原爆投下後の日本を生きたという意味で)当事者であった日本の舞踏家たちもまた、原爆を主題とした創作は行っていない。しかし、シルヴァーヌ・パジェス『欲望と誤解の舞踏』(2017)に詳しいが、1978年、日本の舞踏が「原爆に対する直接的な反応として生じた」としてフランスで紹介され、以降この誤解に基づいた言説が幾度も常套句として繰り返されていった。この言説が最初に登場したのは、室伏鴻《最後の楽園》の上演に際した記事の中だった。本作品のぼろぼろにはがれかけた皮膚は、研ぎ澄まされた感覚器官としての機能を付与されていたにも関わらず、容易に原爆負傷者の焼けただれた皮膚として受容された。実際に本作品の舞台写真は《ヒロシマ》のそれと奇妙に似通っているのである。

このように冷戦下の異なる文脈で、いずれも非当事者によって傷ついた身体が可視化されたことは、原爆表象における他者の苦痛へのまなざしの文化的共時性として再考が可能である。ソ連バレエの一作品《ヒロシマ》と舞踏およびそのフランスにおける受容の比較は、その研究の足掛かりになりうるのではないか。

当日の発表では具体的な創作背景・振付・受容の比較結果を紹介する。

本研究は JSPS 科研費(24KJ0200)の助成を受けたものである